

研究調査報告

「戦時下日本の大衆メディア研究」班 信州資料調査報告

鈴木 一史

(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

神奈川大学非文字資料研究センター（以下、非文字）の共同研究「戦時下日本の大衆メディア研究」班（以下、研究班）では、これまで、2013年に非文字が所蔵することとなった241点（所蔵後も、購入等により継続的に所蔵作品の充実を図っている）の国策紙芝居を主な対象に、作品内容等の研究を進めてきた。また、旧植民地を含む、各地域における国策紙芝居の所蔵状況調査も進めてきた。前者の成果は、安田常雄編『国策紙芝居からみる日本の戦争』（2018年、勉誠出版）や本誌での連載「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語」、研究会での報告要旨等（主に本誌31、37、39、40号）で発表されている。また、後者の調査内容は、本誌各号（主に34、35、38、40号）で随時報告してきた。

本稿では、2018年11月23日（金）～25日（日）に研究班が行った、信州（長野県）での所蔵状況調査（以下、本調査）の成果と課題を報告する。なお、読みやすさを考慮し、資料の名称等については、適宜、旧字体を新字体に改めた。

本調査における研究班からの参加者は、次のとおりである。本文中では、参加者の敬称を省略した。肩書きは調査当時のものである。

安田 常雄（第42回日本児童文学学会特別賞授賞式出席のため、24日午前中まで参加）

森山 優、大串 潤見、原田 広、鈴木 一史（以上、全日程参加）

1. 1日目 11月23日（金）

須坂市立博物館（長野県須坂市臥竜2-4-1、調査時は休館中）にて、同館の村木真由氏及び市立須坂図書館長の文平玲子氏立会のもと、調査を行った。当日は、地元の紙芝居サークル（信州須坂紙芝居のさとプロジェクト。以下、プロジェクト）の方々や、信州戦争資料センター（以下、センター）代表の同席を得た。

調査対象は、同博物館所蔵の紙芝居で、主に次の二つに大別される。

(1) 塩崎源一郎氏寄贈資料

「紙芝居最後の絵元」といわれた塩崎源一郎氏（1912～2000年）から寄贈された街頭紙芝居である。塩崎氏は、1931年から東京で紙芝居屋として活動した後、戦後は大阪で絵元（街頭紙芝居の配給元で、脚本家

や画家などを雇い、作品を製作する）として活動した。塩崎氏が1947年に設立した絵元の三邑会（さんゆうかい）は、現在でも、一般社団法人塩崎おとぎ紙芝居博物館として存続している（塩崎氏の足跡は、鈴木常勝「街頭紙芝居を21世紀の子どもたちへ「三邑会」塩崎夫妻の仕事」Estrela 編集委員会編、2001年、『Estrela』89号、pp.52～57に詳しい）。

本資料群は、塩崎氏が須坂市九反田町出身だったことが機縁となり、同博物館に寄贈された。その一部は、同博物館での企画展「セピア色の時代 紙芝居・ラジオ・蓄音機・映画にみる子どもの昭和史」（2002年）で紹介されている。

所蔵作品は、次のとおりである。

『山中鹿之助』（全50巻）

『ちびっこの冒険』（全31巻）

『黒熊王子』（全10巻）

『はくちょう』（全3巻）

作品の一部には、「紙芝居倫理規定管理委員会 審査済」、「画劇製作 三邑会 友愛社 ふるさと 塩崎健市 大阪市西成区花園南一丁目十二-二四 電話(651)八七七二番 千五五七」といった押印が見られた。三邑会の活動をうかがえる資料といえよう。

(2) 黒岩和男氏関係資料

黒岩氏は、須坂市でそろばん塾を開いていた人物だという。アンティークを好み、蓄音機等を収集したとされる。本資料群は、保育園等から放出されたものとのことだった（前述の企画展に際して行われた、黒岩氏からの聞き取りによる）。なお、須坂市公式ホームページ内の「平成元年度表彰状贈呈者」に、「私財寄附者」の一人として、黒岩氏の名が記されている。贈呈理由は、「市文化振興のために、高額な美術図書を寄附された」ためとのことである（<https://www.city.suzaka.nagano.jp/contents/item.php?id=591513885e53f> 2019年6月23日閲覧）。

資料のうち、紙芝居は全17点であった。新たに存在することが判明した国策紙芝居は、次の2点である。

『顕如上人さま』

（発行元、発行年とも不明。絵のみ）

『光顔院さま』

（真宗本願寺派社務所、1943年4月20日）



当日は、2班にわかれて資料を撮影した。1班（森山、大串）は、黒岩氏関係資料の国策紙芝居（新規発見分及び同じ作品で発行年等が異なるもの）を撮影し、もう1班（原田、鈴木）は、塩崎氏の資料を中心に撮影した。ただし、塩崎氏の資料は、研究班が対象とする国策紙芝居ではないため、表紙及び前述の押印部分を中心に撮影した。



同館での調査後、センター代表による国策紙芝居（『敵くたる日まで』）の実演が行われ、好評を博した。

2. 2日目 11月24日（土）

塔之腰公民館（長野県長野市稲里町下水鉋塔之腰）にて、センター代表立会のもと、センターが購入等により収集した紙芝居を調査した。センターは、主に長野県域における、明治時代～昭和30年代頃の戦争に関わる資料を収集している（詳しい活動内容については、次頁の紹介文を参照されたい）。

新しく存在が確認された国策紙芝居は、次の8点である。

日本教育紙芝居協会脚本、木原芳樹絵『仲よし部落』

（日本教育紙芝居協会、1941年5月1日）

森川五朗原作、飯沼喜一作画『兄さんの手紙』

（大日本画劇株式会社、1941年7月25日）

鈴木景山脚本、浦田重雄絵『国思ふ』

（日本教育画劇株式会社、1943年2月5日）

長尾盛之助脚本、京極佳夕絵『大楠公』

（紙芝居刊行会、1943年7月15日）

鈴木景山脚本、小谷野半二絵『コタバル』

（日本教育画劇株式会社、1944年3月15日）

渡邊三郎脚本、伊勢田邦男絵『桑と子供と兵隊』

（大日本画劇株式会社、1944年10月20日）

宇多五吉原作、小林夜詩男脚色、玉井徳太郎絵『武兵衛と三左』

（大日本画劇株式会社、1944年12月15日）

『ドウブツトナリグミ』

（藤井得三郎商店、発行年不明）

また、これまで雑誌『紙芝居』（日本教育紙芝居協会）等で、作品の存在は判明していたものの、作品の現物が未発見だった9点について、その所蔵が判明した。

資料閲覧後、2班（1班は森山、大串。もう1班は原田、鈴木）にわかれて、新規発見分及び所蔵判明分の作品等を撮影した。撮影後、センターが所蔵する戦時中の資料（幟旗等）を閲覧するとともに、調査終了後は松代

大本営（現・気象庁松代地震観測所）の庁舎外観等を見学した。

なお、当日は、信濃毎日新聞社の記者である井口賢太氏の取材が行われた。翌日11月25日（日）の『信濃毎日新聞』1面に掲載された記事「国策紙芝居 映す「総力戦」」は、この取材にもとづいている。

3. 3日目 11月25日（日）

千曲市ふる里漫画館（長野県千曲市大字稲荷山2181-1）にて、所蔵資料の概要確認及び展示見学を行った。同館は、1990年に開館した千曲市の施設で、同市稲荷山出身の漫画家・近藤日出造（1908～1979年）を顕彰している。似顔絵等で知られる近藤は、1940年に近衛新体制運動をうけて設立された、新日本漫画家協会の委員を務めた。そして、その機関誌として発行された『漫画』に、多くの作品を発表した。

同館所蔵の『漫画』35冊（一部は常設展示室で展示中）の内訳は、次のとおりである。

1943年：1冊（6月号）

1944年：7冊（1～3、5、7、9、10月号）

1946年：5冊（5、6、9、11、12月号）

1947年：3冊（1、6、12月号）

1948年：7冊（1～7月号）

1949年：9冊（1～5、7、8、10、11月号）

1950年：3冊（2、6、11月号）

戦後に発行された巻号が多いものの、戦時中に発行された同誌の所蔵は、貴重といえる。

また、同館の土蔵内では、近藤の手による原画やフィルム、自伝と思われる原稿の所蔵が確認された。

調査終了後は、長野県立歴史館に立ち寄った。館長の笹本正治氏の案内で館内各所を見学し、資料保存等への理解を深めた。

おわりに

以上の調査結果をふまえて、本調査における成果及び今後の課題を述べる。

ひとつは、所蔵状況調査の位置づけである。須坂市立博物館での調査に同席したプロジェクトのメンバーは、長野県からの交付金（平成29年度地域発元気づくり支援金）を得て、『山中鹿之助』『ちびっこの冒険』『黒熊王子』の複製作りを進めている。また、市民向け実演会の実施、実技指導の講習会なども行っているとのことであった。

たとえ数十年前の資料でも、その大切さを見出し、後世に伝えようとする人々がいなければ、残すことは難しい。しかし、「残さねば」という義務感だけで、資料を守り続けることも難しい。調査中、『山中鹿之助』を撮影する筆者の隣で、プロジェクトのメンバーは、「毎年少しずつ複製しているので、続きを見るのが楽しみ」と談笑していた。重要なのは、資料の保存に関わる人々が、その

こと自体を楽しめるか否かである。そして、自身に得るものがあると考え、無理なく続けられることである。今後の研究班の活動では、所蔵状況調査に加え、紙芝居の大切さと楽しさの両方を、広く伝えることも求められよう。

もうひとつは、戦中から戦後における、紙芝居と漫画との関わりである。先に述べた近藤日出造は、戦時中、雑誌『漫画』に作品を発表していた。同時に、『總意の進軍 翼賛選挙貫徹のために』（大政翼賛会宣伝部、1942年）や『敵だ！倒すぞ米英を』（大政翼賛会宣伝部、1942年）といった国策紙芝居の絵も描いていた（いずれも非文字所蔵）。

近藤をはじめとする戦時中の漫画家については、その無思想性に注目して「腕達者な小職人でしかなかった」（石子順造「戦中マンガの精神構造」『現代マンガの思想』太平出版社、1970年）と分析する視点がある。一方、「戦争中に描いたものはすごかった」（峯島正行『近藤日出造の世界』青蛙房、1984年）と近藤を評する回想も残されている。一見相反するこれらの評言はしかし、近藤がさまざまな注文や需要を捉えたうえで、一定の水準をたもちながら、作品を描き続けたことを示している。このことから、近藤にとっての紙芝居、そして漫画とは

何だったか、という問いを導き出せよう。現在の視点から、当時のメディアに関わっていた人々のつながりを調べることも、必要である。しかし、人脈を調べるだけでは、当時のメディアのありようを明らかにしたことはない。当時作品を手がけていた者にとって、紙芝居とは、漫画とは何だったのか。当時の人々にとって、紙芝居と漫画は何が異なり、どこが同じだったのか。こうした問いを考えることが、当時のメディア同士の関係を明らかにすることに、つながるのではないだろうか。

もちろん、三邑会の注文を受けていた絵師のなかに、手塚治虫とともに『新宝島』（育英出版、1947年）を描いた酒井七馬がいたといった事実も、依然重要である（本稿で紹介した街頭紙芝居『ちびっこの冒険』の作者は、佐久良五郎（酒井七馬の紙芝居でのペンネーム）である）。作り手と作品、人間関係という多面的な視点から、紙芝居と漫画との関わりを明らかにすること。これもまた、研究班にとっての、今後の課題といえよう。

本調査は、紙芝居をいかに地域のなかで残していくか、という課題や、国策紙芝居研究を一層深めるための知見を得られた点で、意義ある調査となった。調査に際してご協力を頂いた関係各位に、心から感謝申し上げたい。

信州戦争資料センターとは

信州戦争資料センターは、戦時下の主に生活にかかわる資料を収集保存分析し、戦争の実態を主義主張にとらわれず発信する長野県民有志の集まりです。長野市在住の代表が個人的に資料を集め、皆で後世に託せるよう、活動しています。

2007年9月25日、長野県木曾郡木曾町で開いていたがらくた市。代表が戦時中の銃剣術訓練用具「木銃」を見つけました。200円で購入したこの木銃は、先端を切って短くし、銃床部分に地元「福島小学校」の焼き印を押した特殊な仕様でした。地域の人に尋ね、太平洋戦争末期、当時の福島国民学校が最高学年の教練に使っていたと分かりました。小学生の息子に担わせると、ぴったり。「この子たちを戦場に送るような時代にはしてはならない」。この時の強い思いが活動の始まりでした。

時間とともに散逸し朽ちていく、戦争の実態を物語る品々。今のうちに保存してその意味を読み解き伝えれば、これからの世代が戦争を避ける道を選ぶときに役立つはず。そこで誰もが戦争を身近なこととして考えられるよう、庶民とつながりのある戦時資料を、地元長野県のものを中心に集め始めました。オークションで落札する、古書店をあさる、ご寄付をいただく…。独力で細々と続け、収蔵品は4500点を超えました。この国で皆があの時代、確かに戦争に取り組んでいたと語る広告や雑誌、玩具、手紙、回覧、紙芝居、代用品などなど。これらのモノが、戦争とは遠いところで起きるのではなく、生活のそばにひそみ、人々に直結すると伝えてきます。

戦時下の「モノ」も証言と同様、代々戦争を語り継ぐ

力があり、集約することでその時代の俯瞰も可能になります。信州戦争資料センターを名乗った2015年から、毎年長野市を中心に展示会を開いています。ニュースや映画、研究で収蔵品を活用していただく場面も出てきました。戦争の本当の姿を知りたいという人々の思いに、いつでも応えられる存在でありたいと思っています。



信州戦争資料センターの展示会（2017年）



信州戦争資料センター発行の図録
「S12-S20 信州と戦争の時代」